天才古瀬教授の商大生活

松本幸四郎主演のテレビ番組「天才柳沢教授の生活」の主人公柳沢教授、実は本学で大活躍された古瀬大六先生なのです。小樽で生まれたお嬢さんがお父様を描かれたマンガが評判になり、テレビ化へ。古瀬先生に小樽時代を振り返っていただきました。

古瀬大六先生の小樽商科大学在任時のエピソード

1. アナログ型コンピューターの製作

1946年、東芝本社経理部を退職後、小樽高商講師に採用されました。間もなく小樽高商は全国で唯一の商科系単科大学に昇格し、小樽商大となりました。

私が小樽商大に就任して第一に試みたのは、管理科学科の新設と、電子計算機の導入でした。当時の電子計算機市場を支配していたのはIBM社であり、その小型機として評判の良かったIBM1620でも数百万円を超え、人文系大学の貧弱な予算の下では高嶺の花でした。それならば、多少精度は劣っても、安価なアナログ型計算機を自製した方がよいと考えました。アナログ型ならば、中の構造は直流アンプであり、素人でも組み立て可能です。早速、アナログ・コンピューター回路のガイドブックとして著名だったアメリカのコーン氏の本を入手し、部品集めに奔走しました。飛行機での出張など考えられない時代、鉄道と青函連絡船を使って何度も上京し秋葉原で探し回ったり、メーカーとの直交渉のすえ、最終的に4台のアンプと電源で小型のアナログ・コンピューターを作り上げました。これを使って線形計画問題を解き、さらにそれを経済の一般均衡モデルの一種に仕上げて、論文にまとめました。ところでこれらの研究はもちろんのこと、コンピューター製作の作業も私の研究室で行っており、必然的にボール盤等の工作機械も研究室に設置していました。私の研究室は（当時の）短大の事務室の真上に在り、事務長は研究室にあるこの重いボール盤が自分の頭上に落下するかもしれないと気になってしかたなかったそうです。

2. 図書館の近代化

理工系の研究機関にとって実験室が不可欠の施設であると同様に、或いはそれ以上に図書館は人文社会系の大学にとって欠くことのできない設備です。本学にはシェル文庫、大西文庫、手塚文庫などの経済学における貴重な文献を所蔵しているのに、それを容れる図書館は大正元年（1912年）に設計建造された古典的鉄骨5層の博物館のまま、45年間の永きにわたって放置されていました。これに対し戦後の欧米大学図書館は学生へのより快適な勉学場所の提供をその最上位の目的として意識するようになっていました。当時管理科学科の新設に努力中であった私は、商科大学の情報システムの近代化の重要な一環である図書館が旧態依然たる明治末期の姿のままで、これから50年間も存在し続けることに、大きな危機感を抱きました。そこで、当時の大学図書館建築についての指導的著書として著名だったHoover（編者注：Herbert Hoover？; 米スタンフォード大学フーバー研究所設立者）氏の本を念入りに読んでみました。それは全くの驚異の世界でした。私にはまさに地獄の底から眺める天国のように思えました。これを契機に、私は小樽商大の学生定員を出発点として、図書館の在るべき理想の姿を描く作業に没入しました。殊に、その3階の全フロアをすべて学生の読書室に充て、その四周の明るい窓際に沿って、出来るだけ多くの個別の読書机を配置しました。その中央部には講義科目別の指定図書を自由接架式で閲覧できるようにしました。（編者注：2度の増築により各階の構成が変わっています。）

20世紀中期の日本の大学図書館の中で、これほど学生にとって利用しやすい施設は、此処以外には存在しなかったと自負しています。しかし、私の創り上げた理想の設計図が、そのまま簡単に現実の建物として実現されたわけではありません。お堅い文部省の工事事務所との折衝に当り、文部省の役人連中を説得して、それを実現させて頂いたのは、元小樽高商の卒業生であり、当時一橋大学経済研究所の教授だった松田武氏の御努力によるものであり、氏の文部省当局に対する強大な交渉力なくしては、この夢の図書館は夢のままに埋もれてしまったに違いありません。この図書館を利用される学生諸君は、どうか松田氏の並々ならぬ交渉力と努力があって初めて、この建物があり、この図書があるのだということを思い出して頂きたいと存じます。彼の努力が小樽商大の歴史を記したどの文献にも記されていないことを私は心から残念に思っております。